

# 裏口からの沖縄



株式会社ニッセイ基礎研究所 主任研究員  
(沖縄振興開発審議会委員)

## 白石 真澄

上野千鶴子は「ヤマトンチュから見た沖縄」(『沖縄の人生』: 光文社)のなかで、沖縄への入り口には表玄関と裏口があるという。表玄関から沖縄に入るのは、航空会社のキャンペーンに乗って、本土資本系列のリゾートホテルに泊まり、内地から空輸された食材でつくった料理をホテルのレストランで食べる。つまり、舞台装置は本土資本によって、南国リゾート風や無国籍風に造られ、観光客の金のほとんどは、本土資本に落ちる。

裏口から沖縄に入ることとは、一筋縄ではいかないシマの共同体のあたたかさや排他性、生々しい戦争の傷跡、ウチナーンチュとヤマトンチュとアメリカがおりなす差別の重層構造、さらにカネと開発が変えていく自然と人の心など、日々の暮らしの中で、直面する沖縄の現実を見ることであるという。これまで、私は仕事で、またプライベートで、幾度も沖縄に足を踏み入れた。久米島でダイビングを、また、宮古島でゴルフも満喫した。が、残念ながら、いずれも標準語を話すフロントスタッフのいる近代的なホテルに泊まり、空港できれいに包装されたお土産品を買って帰るといふ表玄関からの旅であつた。観光客として短期間、沖縄に滞在して見る沖縄と、沖縄に住んだり、長期滞在して裏口からみる沖縄が別人の顔を持つことは想像に難くない。

これからの時代、人々が求める旅は、ヤマトンチュが演出する沖縄ではなく、裏口からの沖縄、つまりウチナーンチュの姿の見える沖縄ではないだろうか。ありのままの自然に癒され、知的欲求を満たし、自己実現を可能にする、つまり、芸術・文化の鑑賞、地元の食を味わい、歴史を学び、暮らしを体験する舞台としての沖縄ではないかと思う。

沖縄を訪れる観光客は復帰時には四十四万人であつたが、平成十一年には四百五十六万人、観光収入は四百九億円から四千四百五十一億円(平成十年)へと、いずれも十倍以上の伸びを示し、県民総支出に占める割合も十二%を超えた。第三次沖縄振興開発計画において、沖縄に国際的な観光・リゾート地を整備することが重要施策として位置付けられ、すでに観光やリゾート産業が地域の雇用機会創出や、人材育成につながってきたことは間違いない。

しかし、同時に、観光客誘致のために、貴重な珊瑚礁が削られ、いかにも「南国らしさ」を演出した大きなホテルが建てられ、本来の沖縄らしさと自然の喪失が進んでしまった。

最近、沖縄にカジノをつくるという構想が浮上している。東京都の臨海部、石川県珠洲市、秋田県の雄和町でもカジノ誘致が話題に上っている。衰退していたギャンブルの街からマフィアを追い出し、ショービジネスやショッピングの街として成功したラスベガスは、これまでアメリカ経済の好調を背景に国内から多くのリピーターを集め、日本からも毎年三十万人が訪れている。しかし、IT産業の伸び悩みや景気減速が影を落とし、ホテルの週末料金やカジノ収入は下降線をたどりはじめているなど、カジノは景気変動を受けやすい産業である。

ベネチア運河を配したり、十五分ごとに爆発を繰り返す模擬火山のあるホテルなど、塊のようにそびえる数千室規模のテーマパークホテルは、陳腐化させないためにも、数年ごとに再投資が必要となる。夜になれば時間も金銭感覚も麻痺させてしまうようなネオンサインの海と化すストリップ大通りは醜悪だ。商業主義に流され、目の先の雇用確保や景気浮揚だけを狙った観光政策は地域の持続的発展と両立しないし、訪れる人に媚びる観光地はいずれ飽きられる。

沖縄の観光を考える上では、ヤマトンチュが演出する沖縄ではなく、裏口からの沖縄、つまりウチナーンチュの姿の見える沖縄をみせてほしいものだ。

家族で長期滞在できる清潔でシンプルで、かつ英国のB・Bのように安い費用で泊まれるホテルがあれば、沖縄の長寿に係る色・織物・伝統芸能にふれたり、島のオバアから昔物語を聞いて夜を過ごす。そんな楽しみ方も可能になるのではないか。